

日本海沿岸地域の弥生時代鉄剣

—短茎短剣の様相把握を中心として—

今 福 拓 哉

1. はじめに

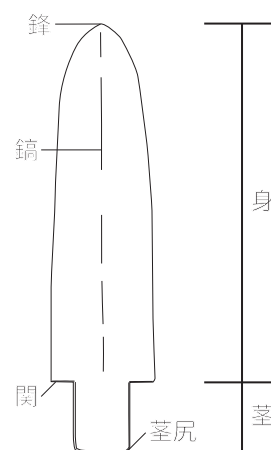
弥生時代の鉄剣は鉄製武器の中でも出土数が多く、汎列島的に各地で出土する考古資料である。その出土量から全国的な集成に基づく分類が可能であり、分類に基づく分布や流通の検討が行われている。また、いわゆる長茎短剣を中心とし、同工品とも考えられる同形同大の鉄剣の存在から規格性や同一地域での生産について想定されており、列島の特定地域での鉄剣生産も指摘されている。しかし、短茎短剣については弥生時代の鉄剣出土の主体となるものの、十分な検討がなされてきたとは言い難く、列島内での生産や流通についての解明には課題が残る。本稿ではこれらの課題を解決する足掛かりとするため、日本海沿岸地域出土の短茎短剣について様相の把握を試みる。

2. 研究の現状と課題

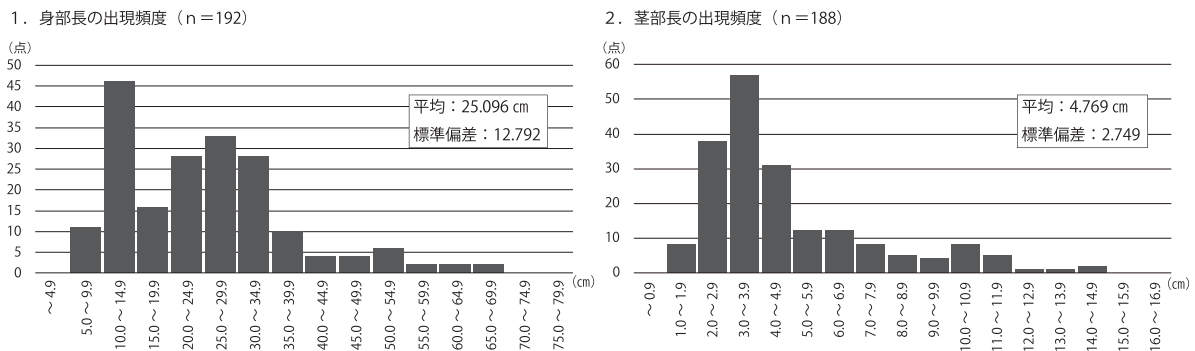
(1) 研究史概略

弥生時代の鉄剣は身部や茎部、関といった各部の形態（第1図）に着目した分類を基にし、生産や流通について論じられてきた。研究動向としては、1980年代前半までは小田富士夫や潮見浩、東潮により身部長や茎部長に着目した分類が行われ、列島出土鉄剣の評価が与えられている（小田1977、潮見1982、東1986）。特に潮見や東は、中国大陆や朝鮮半島出土鉄剣もふまえた上で、列島出土鉄剣を舶載品として位置付けしている（潮見前掲、東前掲）。資料数の増加に伴う研究深化が進んだ1980年代後半以降は鉄剣の平面形態に着目した型式分類を基軸とし、舶載品や舶載品再加工品、列島製作品の抽出がなされている（大庭1986、川越1993、禹1999、池淵2003、会下2007など）。特に、川越哲志は弥生鉄剣の全国集成を行い、各部のサイズに加え、平面形態もふまえた分類を行行列島製品の抽出を試みており（川越前掲）、サイズに着目した弥生鉄剣研究をさらに深化させたものとして評価できる。そのほか、身部長と茎部長の比率に着目した分類（大庭前掲）が行われるなど、多様な着眼点から弥生鉄剣の生産・流通について検討が進められている。

このような鉄剣の平面形態に着目した研究が進められる一方で鉄剣断面形態に着目した検討も近年活発になされている（村上1999・2000ほか、岩井2007、杉山2015a・2016・2017、ライアン2017・2019・2021、鈴木2020、立谷2020）。村上は製作技術水準が鉄剣形態に反映されると指摘し、弥生中期末頃の大形鉄剣の列島生産を可能とした鍛冶技術から、重厚な鉄剣を北部九州製作、その他の鉄剣を列島他地域製作と位置付けするとともに、弥生後期後半から終末期の日本海沿岸部や東日本に流通する長剣に舶載品のほか北部九州製のものも存在することを想定している（村上2000ほか）。また、杉山和徳は、身部および茎部の長さに加え、厚みや側面形態に基づいた分類から列島における鉄剣出現について言及し、弥生中期の重厚な鉄剣製作を想定するとともに扁平化・小型化といった変遷について指摘している（杉山2015a）。ライアン・ジョセフも各部の長さに加え、厚みや横断面形態に着目した分類を行い鉄剣生産の再検討を実施している（ライアン2017・2021）。ライアンはいわゆる長茎短剣の成立過程についても言及しており、弥



第1図 鉄剣各部名称



第2図 弥生時代鉄剣の身部長及び茎部長の出現頻度

生中期後半の舶載品主体と終末期の朝鮮半島の影響下で成立した列島製作品の二相に区分するとともに、列島内での展開について言及している (ライアン2017)。なお、弥生鉄剣の形態的特徴に基づく分類により抽出される地域相から、北部九州のみならず、列島各地での鉄剣生産・流通・受容について検討が進められている (岩井2007、福島2007・2018、杉山2016・2017、ライアン2017・2019・2021)。

(2) 課題設定

上記で確認した弥生鉄剣に関する先行研究をふまえ

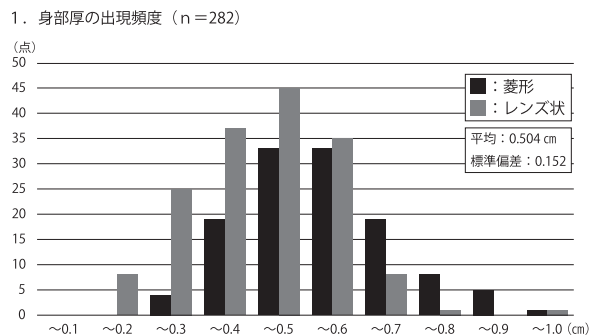
ると、その多くを舶載品として評価する見解 (豊島2010) があるものの、一定量が列島内で生産されている状況を想定できる。このような列島製作が想定される弥生鉄剣には同形同大のものが存在することも指摘されている (岩井2007・杉山2017)。筆者はこのような同形同大の弥生鉄剣は、製作地における製作者あるいは製作集団の鉄剣製作に関する指向が反映されている可能性を想定している。このような規格性に言い換え可能な指向の存在が想定できる弥生鉄剣の様相把握を行うことにより、列島各地域における鉄剣生産や生産品の流通の実態について検討が可能であると考え。なお、上記の同形同大の鉄剣の存在から同一地域での生産を言及する事例は長茎短剣を主体としている (岩井前掲・ライアン2021)。しかし、長茎と短茎については研究者らにより任意に区分された形態差であり、同時期に生産される短茎短剣についても規格性の有無について検証が必要と考える。そこで、本稿では上記した課題解決の足掛かりとするため、日本海沿岸地域で出土する短茎短剣を中心としてその様相を把握する。

3. 対象資料と分類

(1) 短茎短剣の抽出

まず、対象資料の抽出および分類の基準となる鉄剣各部の長さ・幅・厚みについて列島出土資料を基に確認したい。これにより短茎短剣を抽出し、様相の把握を行う。なお、各部の計測値⁽¹⁾については全国集成を実施した結果を反映している⁽²⁾。集成にあたっては川越編2000を底本とし、近年の出土事例を追加した⁽³⁾。

短剣と長剣の区分については、身部長の出現頻度 (第2図1) から検討を行った。その結果、身部長については、10~15cm、25~30cm、50~55cmに出現のピークが認められた⁽⁴⁾。また、平均については25.096cmとなり、標準偏差は±12.792となる。短剣と長剣の大別については、多くの先行研究で30~40cmに設定されており (大庭1986、池淵2003、杉山2015aほか)、平均+標準偏差 (37.888) もこの範囲内に収まる。ただし、研究者により設定値が異なることから、本稿では出現頻度の状況をふまえ、身部長37.8cmを短剣と長剣の境界とした。一方、短茎と長

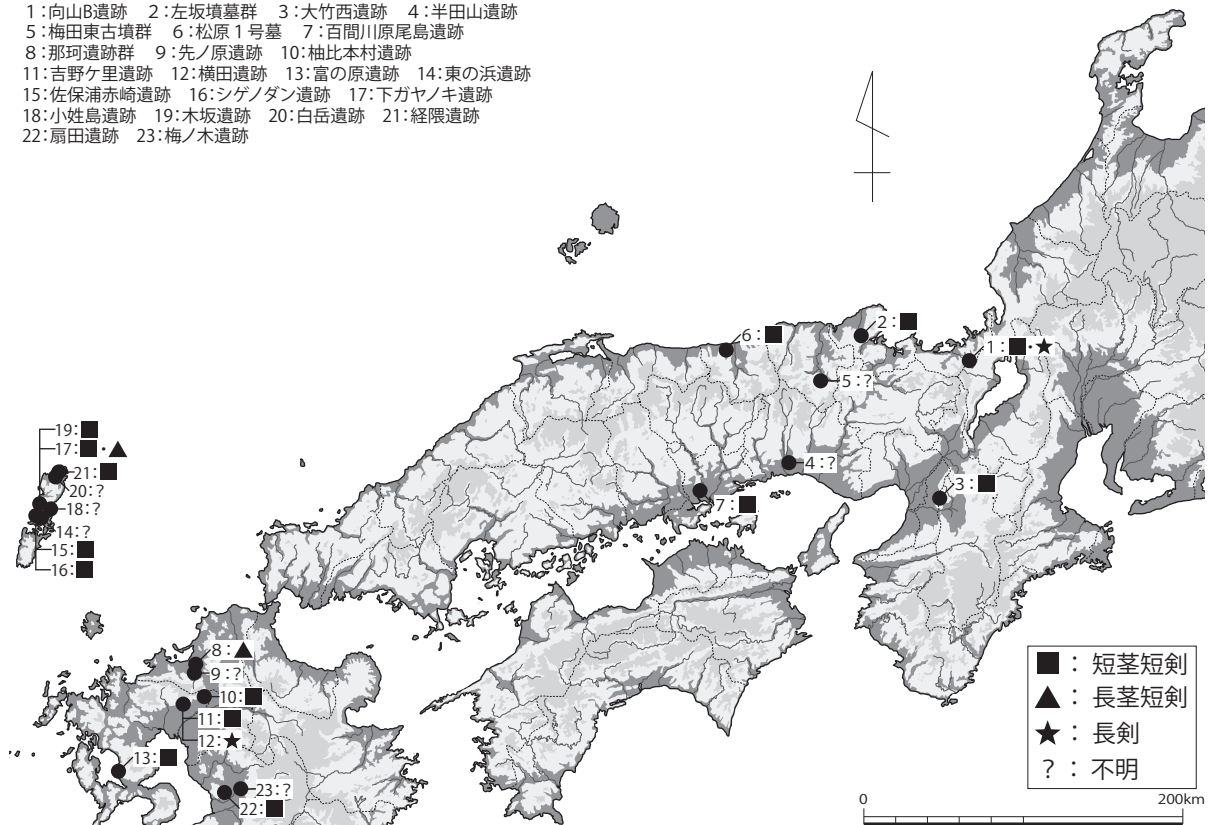


第3図 弥生時代鉄剣の身部厚の出現頻度

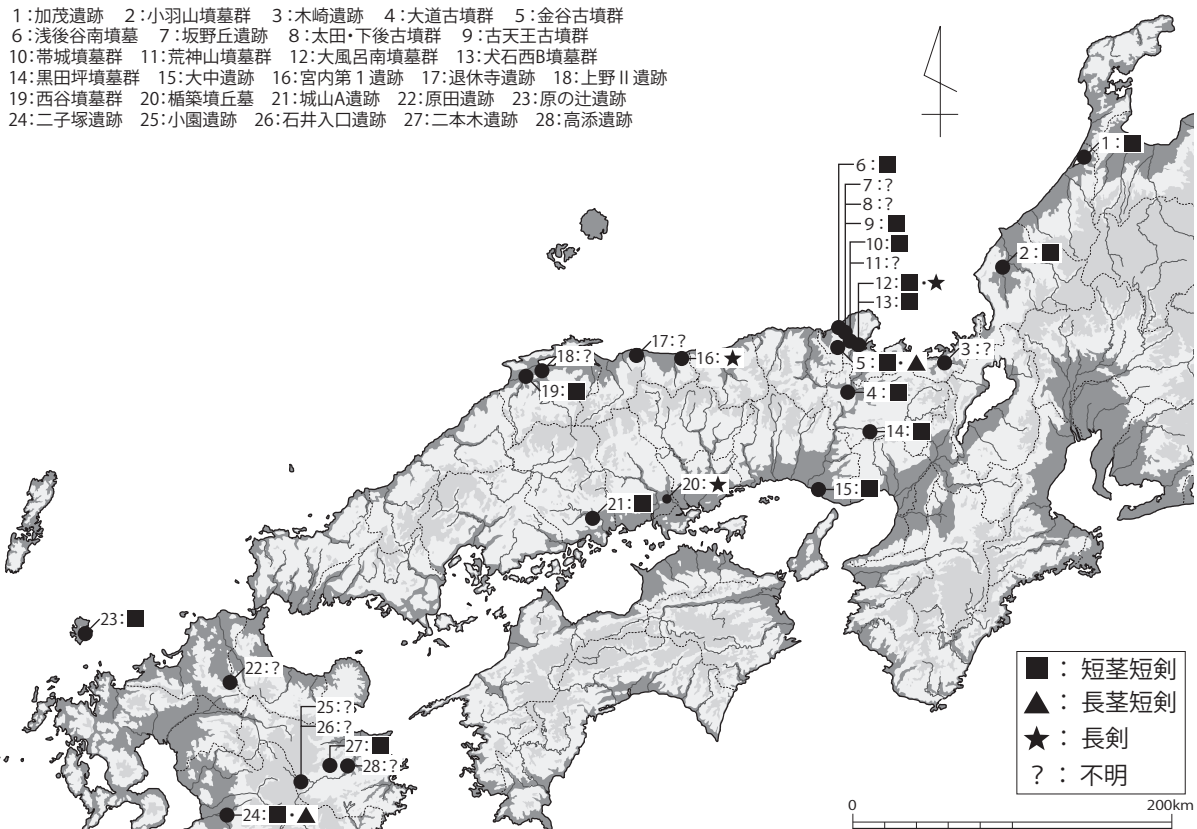


第4図 鉄剣出土地（弥生時代後期）

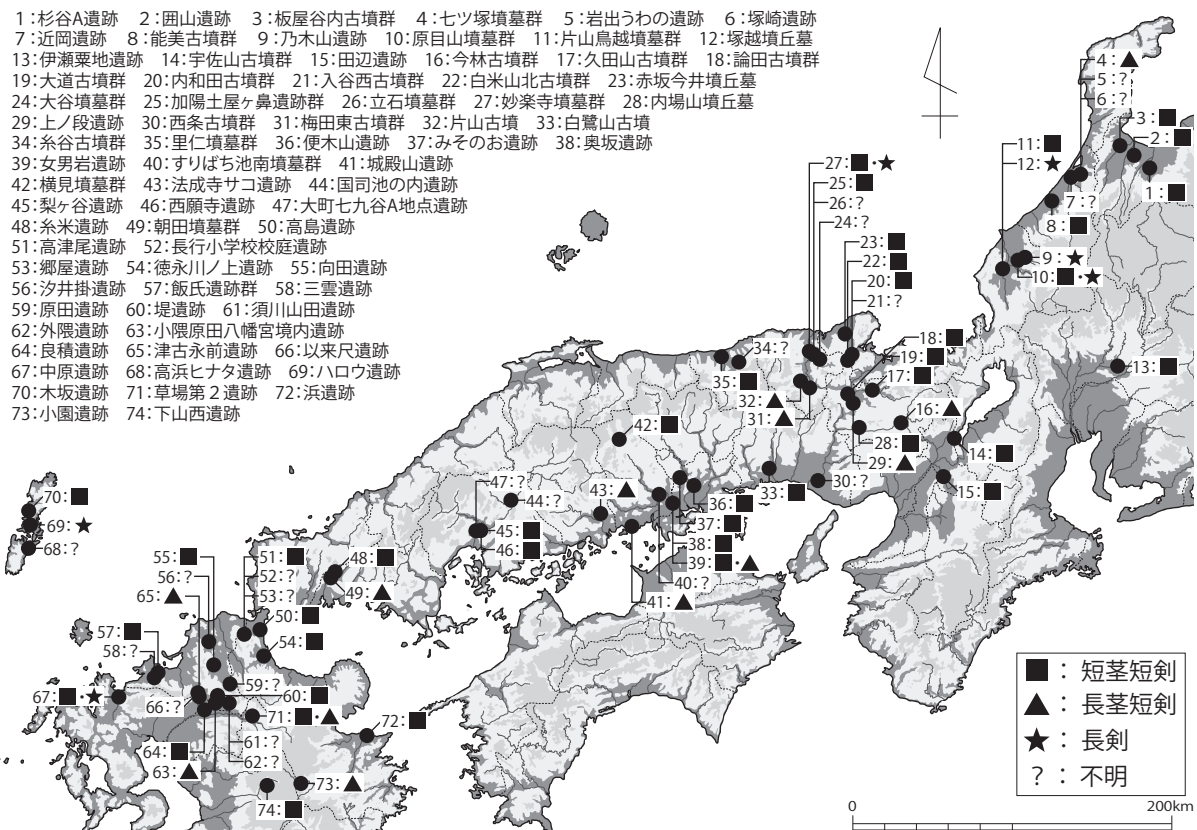
- 1: 向山B遺跡 2: 左坂墳墓群 3: 大竹西遺跡 4: 半田山遺跡
 5: 梅田東古墳群 6: 松原1号墓 7: 百間川原尾島遺跡
 8: 那珂遺跡群 9: 先ノ原遺跡 10: 柚比本村遺跡
 11: 吉野ヶ里遺跡 12: 横田遺跡 13: 富の原遺跡 14: 東の浜遺跡
 15: 佐保浦赤崎遺跡 16: シゲノダン遺跡 17: 下ガヤノキ遺跡
 18: 小姓島遺跡 19: 木坂遺跡 20: 白岳遺跡 21: 経隈遺跡
 22: 扇田遺跡 23: 梅ノ木遺跡



第5図 鉄剣出土地（弥生時代後期前半）



第6図 鉄剣出土地 (弥生時代後期後半)



第7図 鉄剣出土地 (弥生時代終末期)

茎の区分については、先行研究では茎部長 7 cm を基準として区分されている状況である（岩井2007、杉山2015a、ライアン2017）。出現頻度（第2図2）を確認すると、3～4cm、10～11cmに出現のピークが認められ、平均4.769 cm となり、標準偏差は±2.749となる。平均+標準偏差は7.518となり、先行研究とおおむね整合がとれる状況といえる。以上のことから、本稿では先行研究に従い茎部長 7 cm を境界とし、短茎と長茎に区分した。茎部長については、2つのピークが認められるものの、両ピークの前後の長さも確認できる。身部長同様に多様であり、短茎と長茎といった区分のみでなく、さらに細分できる可能性もある。なお、剣身の厚みについては出現頻度（第3図）を確認すると、平均0.504cm、標準偏差±0.152となる。

以上のことから、本稿では弥生時代出土鉄剣の内、身部長37.8cm以下、茎部長 7 cm 以下となるものを短茎短剣として扱う。

（2）対象資料と時期

本稿では、日本海に面する地域のうち、北部九州、山陰、北近畿、北陸を対象地域とした（第4～7図、表1）。また、対象時期については山陰以東で完形の鉄剣出土が確認できるのは後期以降であるため、弥生後期～終末期を主体とした。なお、資料については確実に時期が把握できる資料を対象としたが、資料の制約上、終末期資料については一部古墳時代までおよぶものも含まれている。

第4図は弥生後期～終末期の日本海沿岸部を中心とした鉄剣出土地を示し、第5図に後期前半、第6図で後期後半、第7図で終末期の短茎短剣、長茎短剣、長剣の出土状況を示した⁽⁵⁾。概述すると、後期前半は北部九州、山陰東部、北近畿、北陸に短茎短剣および長剣の出土が確認できる。後期後半には北部九州での出土が減少するが、山陰西部で短茎短剣が認められる。終末期には山陰での出土は減少するが、北部九州で再び出土量が増加し、北部九州、山陰東部、北近畿、北陸で短茎短剣を主体として分布が確認できる。なお、終末期には瀬戸内地域でも鉄剣出土が目立つようになるほか、長茎短剣が各地で確認できるようになることも把握できる。

（3）分類の提示

本稿では、岩井や杉山が指摘するような同形同大の鉄剣の存在（岩井2007、杉山2017）から想定できる鉄剣の規格を重視する。なお、列島製作品の鉄剣に規格性があると想定した場合、同形同大品はもちろんのこと、サイズの異なる同形品も存在するものと考えられる。この視点をふまえた場合、各部の長さや幅の比率を用いた区分が有効と考え、分類を実施した⁽⁶⁾。

第8図1は列島出土短茎短剣の身部長と茎部長の分布を示している。身部長は平均21.736cm、標準偏差±8.758、茎部長は平均3.694cm標準偏差±1.263となる。分布の集中や各部長の平均値および標準偏差をふまえ、下記のとおりA類～E類に分類した。なお、分類の傾向として、A類からE類にかけて、身部長に対し茎部長が長くなる（第10図1）。

A類 茎部長：身部長＝1：10以上

B類 茎部長：身部長＝1：6.15～1：10

C類 茎部長：身部長＝1：4～1：6.15

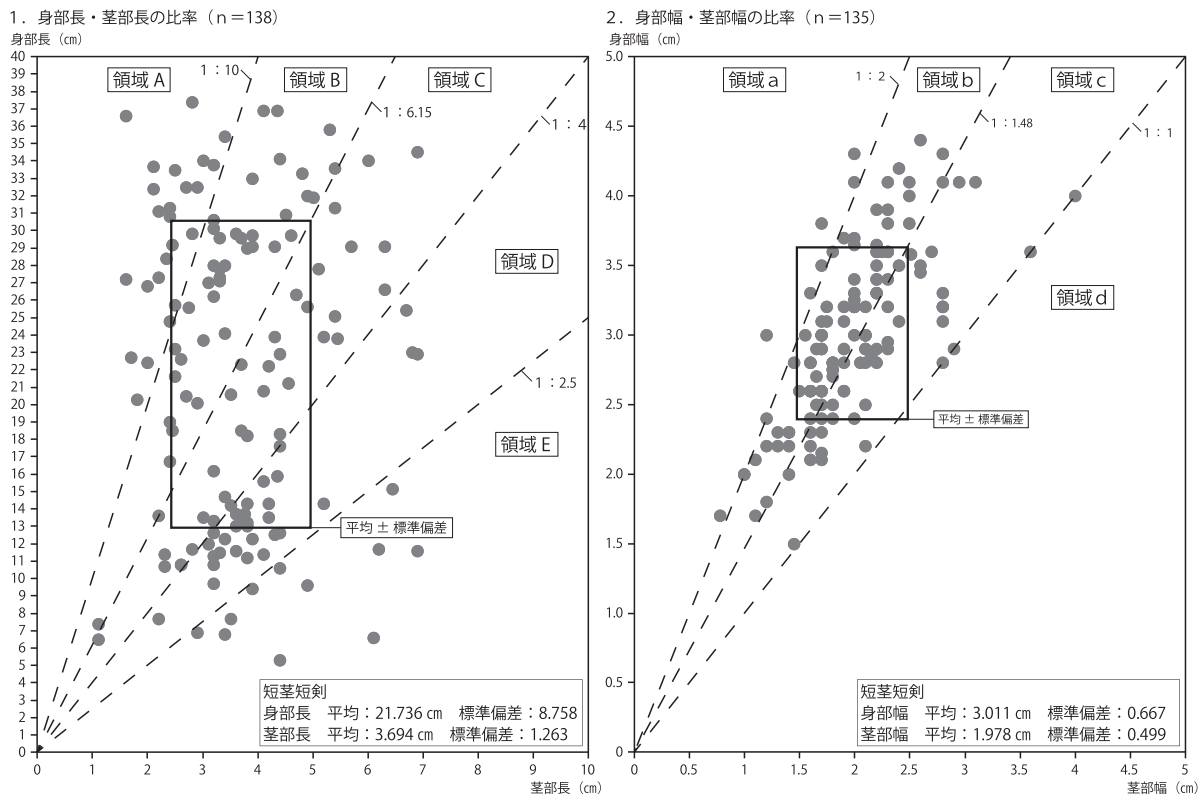
D類 茎部長：身部長＝1：2.5～1：4

E類 茎部長：身部長＝1：2.5以下

第8図2は列島出土短茎短剣の身部幅と茎部幅の分布を示している。身部幅は平均3.011cm、標準偏差±0.667、茎部幅は平均1.978cm、標準偏差±0.499となる。分布の集中や各部幅の平均値および標準偏差をふまえ、下記のとおりa類～d類に分類した。なお、分類の傾向として、a類からd類にかけて、身部幅に対し、茎部幅が広くなり、d類では身部幅と茎部幅が等しくなり、いわゆる無関の鉄剣となる（第10図2）。

a類 茎部幅：身部幅＝1：2以上

b類 茎部幅：身部幅＝1：1.48～1：2



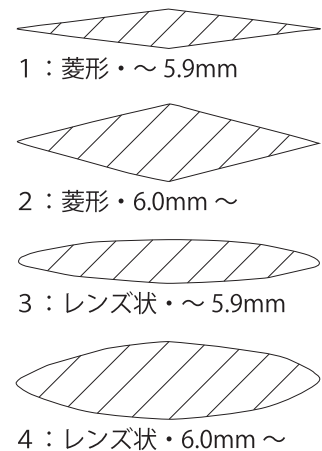
第8図 鉄剣各部の長副比率による分類

c 類 茎部幅：身部幅 = 1 : 1 ~ 1 : 1.48

d 類 茎部幅：身部幅 = 1 : 1

また、製作技術の差異に起因する鉄剣の厚みや身部横断面形態も考慮した分類を実施し、身部厚の出現頻度から1~4に区分した。1・2は横断面形態が菱形、3・4は横断面形態がレンズ状となり、各形態ともに厚さ6.0mmを境界として細分した（第9図）。

なお、先行研究により弥生時代から古墳時代出土鉄剣には長剣の茎の途中切断（池淵2001）や関の再加工（ライアン2020）が確認できることも指摘されている。そのため、茎の再加工などといった製品の二次的改造は否定できない。また、d類とした関部平面形態が無関となる資料については、長剣の身部を途中切断し、再加工により茎部を成形しているものも含まれる。これらのことから、分類により抽出された短茎短剣のグループは鉄剣製作時の形態を捉えてい



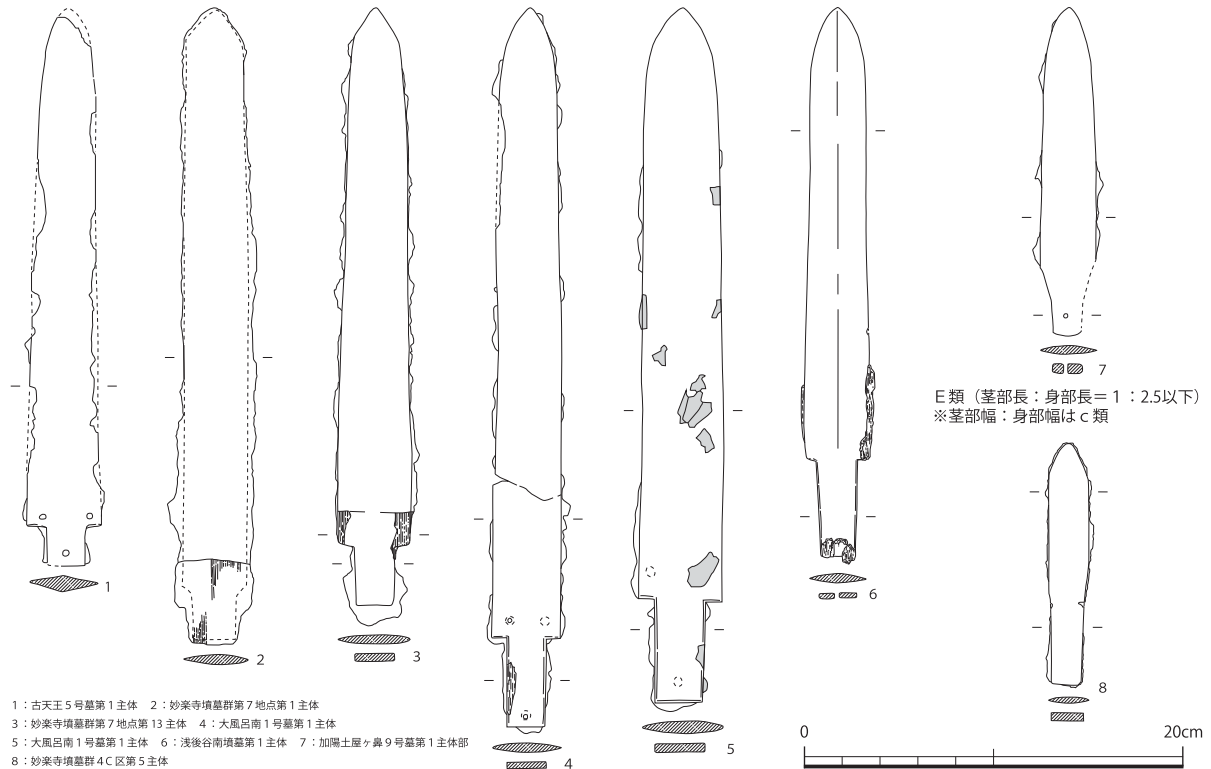
第9図 身部横断面による分類

ない可能性が高い。ただし、二次的改造のうち、関の再加工や茎部の切断は入手あるいは製作した把に合わせた切断と整形といった比較的容易な鍛冶加工が想定できるのに対し、身部切断後の茎の作出については一定程度の加工が必要である。前者に比べ鍛冶技術は高く、鉄剣製作者（あるいは集団）の関与がうかがえる。また、茎の切断が一定程度行われたとしても、地域に特定の分類グループが偏在する場合、地域的な指向による再加工と評価でき、指向する規格に基づく二次的改造であると想定できる。したがって、本稿の分類による短茎短剣の地域性や偏在性の把握は、生産や流通を検討するうえで一定の役割を果たすものと考えている。

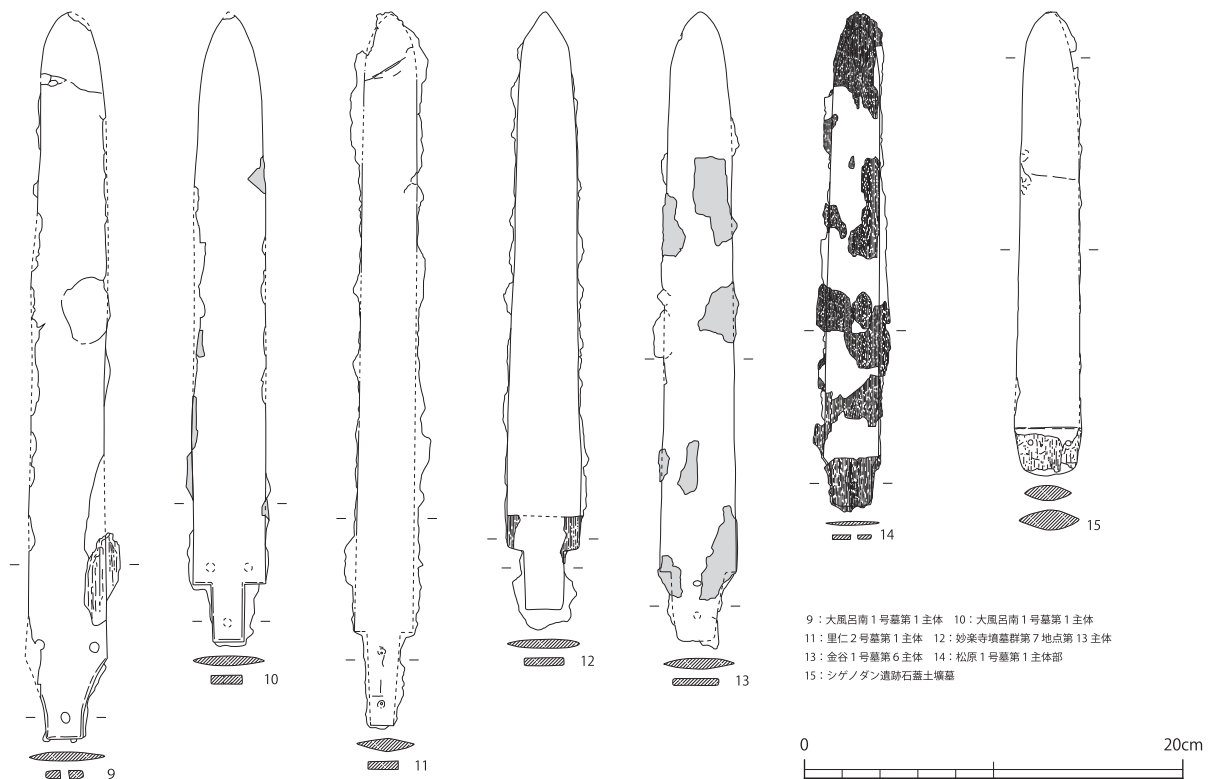
4. 時期別にみた各地域の様相

ここでは時期ごとに各地域の短茎短剣の様相について概述する。なお、対象資料の位置については第5図~第7図、詳細については第11図~第13図および表1を参照していただきたい。

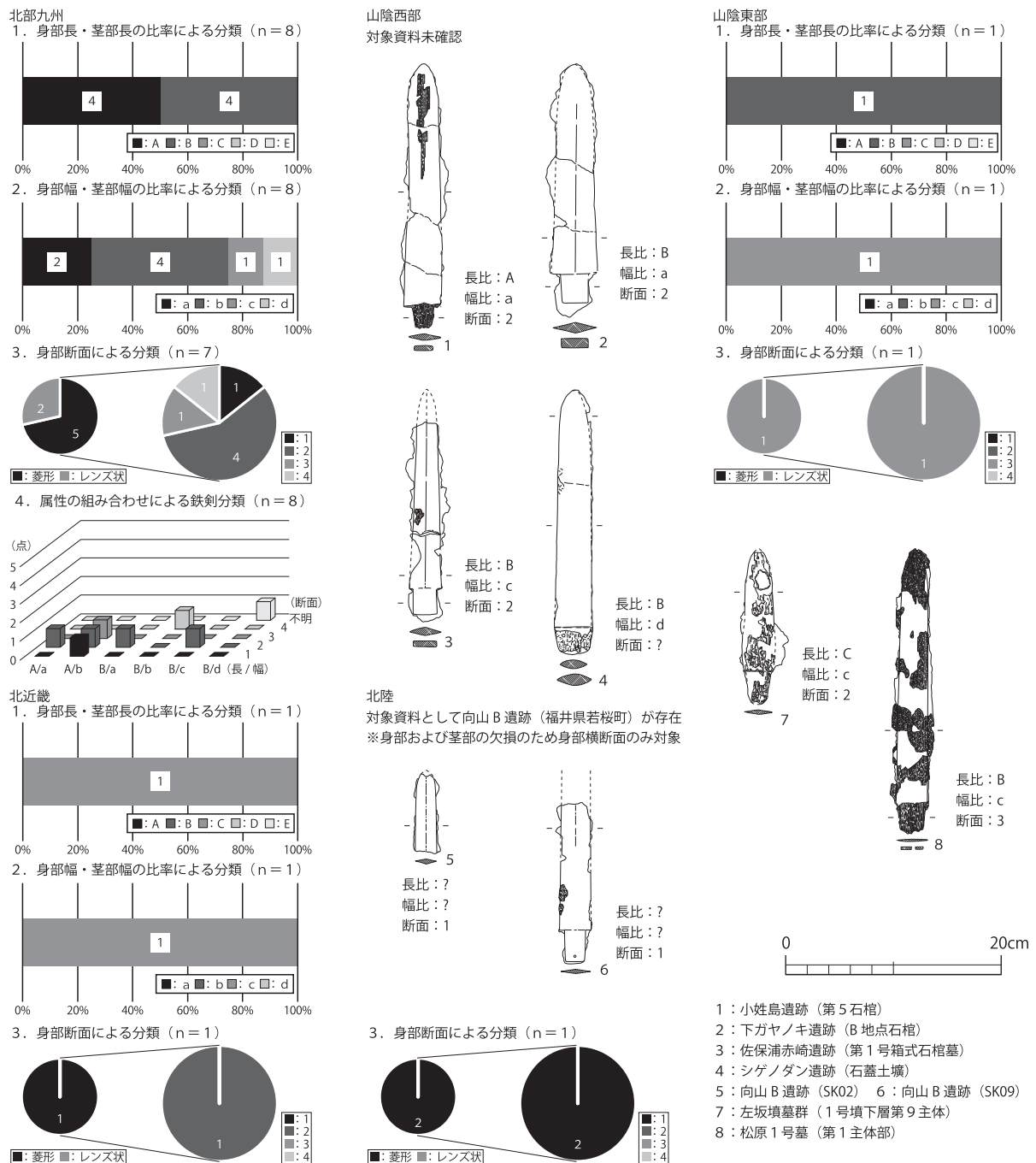
1. 身部長：茎部長の比率による分類

A類 (茎部長：身部長 = 1 : 10以上)
※茎部幅：身部幅はb類B類 (茎部長：身部長 = 1 : 6.15~10)
※茎部幅：身部幅はb類C類 (茎部長：身部長 = 1 : 4~6.15)
※茎部幅：身部幅はb類D類 (茎部長：身部長 = 1 : 2.5~4)
※茎部幅：身部幅はb類

2. 身部幅：茎部幅の比率による分類

a類 (茎部幅：身部幅 = 1 : 2以上)
※茎部長：身部長はB類b類 (茎部幅：身部幅 = 1 : 1.48~2)
※茎部長：身部長はB類c類 (茎部幅：身部幅 = 1 : 1~1.48)
※茎部長：身部長はB類d類 (茎部幅：身部幅 = 1 : 1)
※茎部長：身部長はB類

第10図 短茎短剣各部の長さや幅の比率による分類詳細図



第11図 日本海沿岸地域出土短茎短剣の諸相 (後期前半)

(1) 後期前半

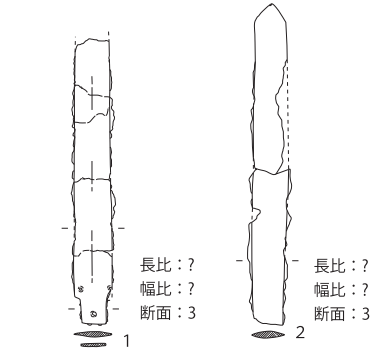
山陰西部を除く各地域で出土が確認できるものの、北部九州を除き1・2点程度の出土となる(第11図)。

北部九州 茎部に対し、比較的身部が長くなるA類とB類のみ確認でき、偏在的な様相を示す。一方で、身部および茎部の幅の比率をみるとb類が主体となるものの、a類・c類・d類も存在しており、バリエーションが認められる。身部横断面については、菱形が多数を占め、6.0mm以上の厚みをもつものが主体となる。各属性の組み合わせを確認すると、主体となる組み合わせは明瞭でなく、出土する短茎短剣に多様なプロポーシオンが認められる状況を指摘できる。

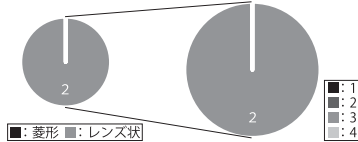
山陰西部 現状、当該時期の鉄剣出土は未確認である。

山陰東部 松原1号墓出土鉄剣のみとなる。長さの比率B類、幅の比率c類となり、身部横断面はレンズ状で薄

北九州



3. 身部断面による分類 (n=2)



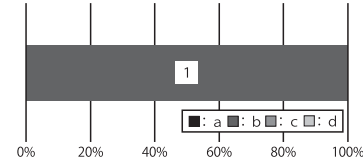
対象資料として原田遺跡（福岡県嘉麻市）・
原の辻遺跡（長崎県壱岐市）が存在
※身部および茎部の欠損のため身部横断面のみ
分析対象

山陰西部

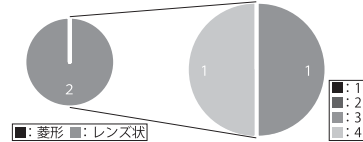
1. 身部長・茎部長の比率による分類

※西谷3号墓第4主体（島根県出雲市）につい
ては、茎尻の欠損のため、長さ比率は不明

2. 身部幅・茎部幅の比率による分類 (n=1)



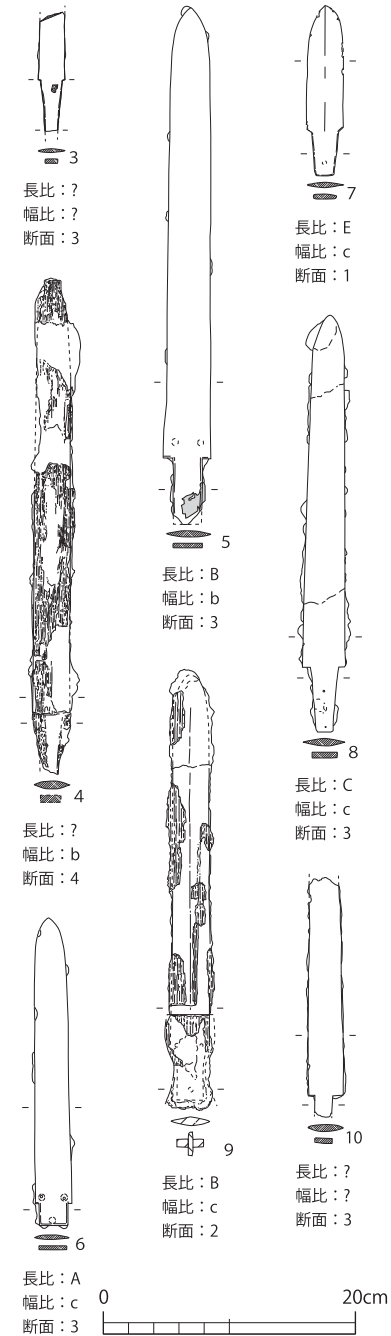
3. 身部断面による分類 (n=2)



対象資料として西谷3号墓（島根県出雲市）
このほかに上野II遺跡（島根県松江市）が存在
※身部および茎部の欠損のため身部横断面のみ
分析対象

山陰東部

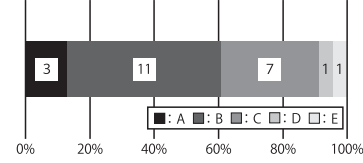
対象資料として退休寺遺跡（鳥取県大山町）が存在
※詳細不明のため、分析対象外



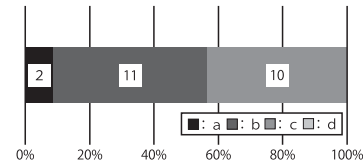
- 1: 原の辻遺跡（土壙墓） 2: 原田遺跡（C-1号石棺墓）
3: 上野II遺跡（S105） 4: 西谷3号墓（第4主体）
5: 大風呂南1号墓（第1主体） 6: 大風呂南1号墓（第2主体）
7: 浅後谷南墳墓（第6主体） 8: 帯城墳墓群B支群北群第1主体
9: 小羽山30号墓 10: 木崎山遺跡（台状墓1第2埋葬）

北近畿

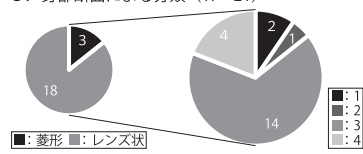
1. 身部長・茎部長の比率による分類 (n=23)



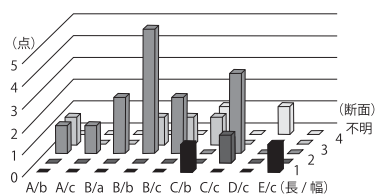
2. 身部幅・茎部幅の比率による分類 (n=23)



3. 身部断面による分類 (n=21)

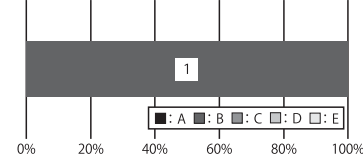


4. 属性の組み合わせによる鉄剣分類 (n=8)

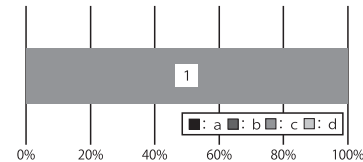


北陸

1. 身部長・茎部長の比率による分類 (n=1)



2. 身部幅・茎部幅の比率による分類 (n=1)



3. 身部断面による分類 (n=3)



対象資料として小羽山30号墓（福井県福井市）
このほかに加茂遺跡（石川県津幡町）・木崎山
遺跡（福井県小浜市）が存在
※身部および茎部の欠損のため身部横断面のみ
分析対象

第12図 日本海沿岸地域出土短茎短剣の諸相（後期後半）

い剣身を呈する。

北近畿 山陰東部同様に出土は少なく、各部の長さの比率はC類、幅の比率はc類となり、身部横断面は菱形で比較的厚い剣身となるものが確認できる。

北陸 遺存状況が不良のためプロポーシオンは不明であるが、身部横断面は菱形で薄いものが存在する。

(2) 後期後半

北近畿で出土量が増加し、山陰西部でも出土が認められる(第12図)。ただし、山陰、北陸は後期前半同様に各地域で数点の出土となっており、北部九州での出土量も減少している。

北部九州 遺存状況が不良の資料を中心とし、プロポーシオンは不明である。身部横断面はレンズ状となるが、比較的厚い剣身をもつものが認められる。

山陰西部 墳墓出土資料として西谷3号墓第4主体、集落遺跡出土資料として上野Ⅱ遺跡出土資料⁽⁷⁾を確認できるが、資料数が少なく地域的な偏在性などは抽出できない。おおむねのプロポーシオンを把握できる西谷3号墓資料では、長さの比率は不明、幅の比率b類となり、身部横断面はレンズ状で厚い剣身を呈する⁽⁸⁾。

山陰東部 資料の詳細が不明なため本稿では分析できていない。

北近畿 後期前半と異なり、多量の鉄剣が出土している。短茎短剣の長さの比率をみるとA類～E類まで確認できるがB類とC類に集中している状況を指摘できる。また、幅の比率についてもa類～c類が認められ、その多くがb類とc類に集中している状況となる。身部横断面は菱形とレンズ状のいずれも確認できるが、大半がレンズ状となり、剣身の薄いものが大半を占めている。各属性の組み合わせについては、バリエーションが存在するものの、Bb3やCc3を中心とし、出土する短茎短剣に偏在的なプロポーシオンが存在する状況を指摘できる。

北陸 プロポーシオンが把握できる小羽山30号墓では、長さの比率B類、幅の比率c類となり、身部横断面は菱形で厚みのある剣身を呈する。このほか、プロポーシオンの不明瞭な資料として木崎山遺跡台状墓出土資料などがあるが、身部横断面はレンズ状で剣身は比較的薄いものが確認できる。

(3) 終末期

北近畿で前段階同様に短茎短剣が一定量出土する。また、北部九州および北陸で出土数が増加する(第13図)。一方、山陰では数点の出土にとどまり、山陰西部では現状出土は確認できていない⁽⁹⁾。

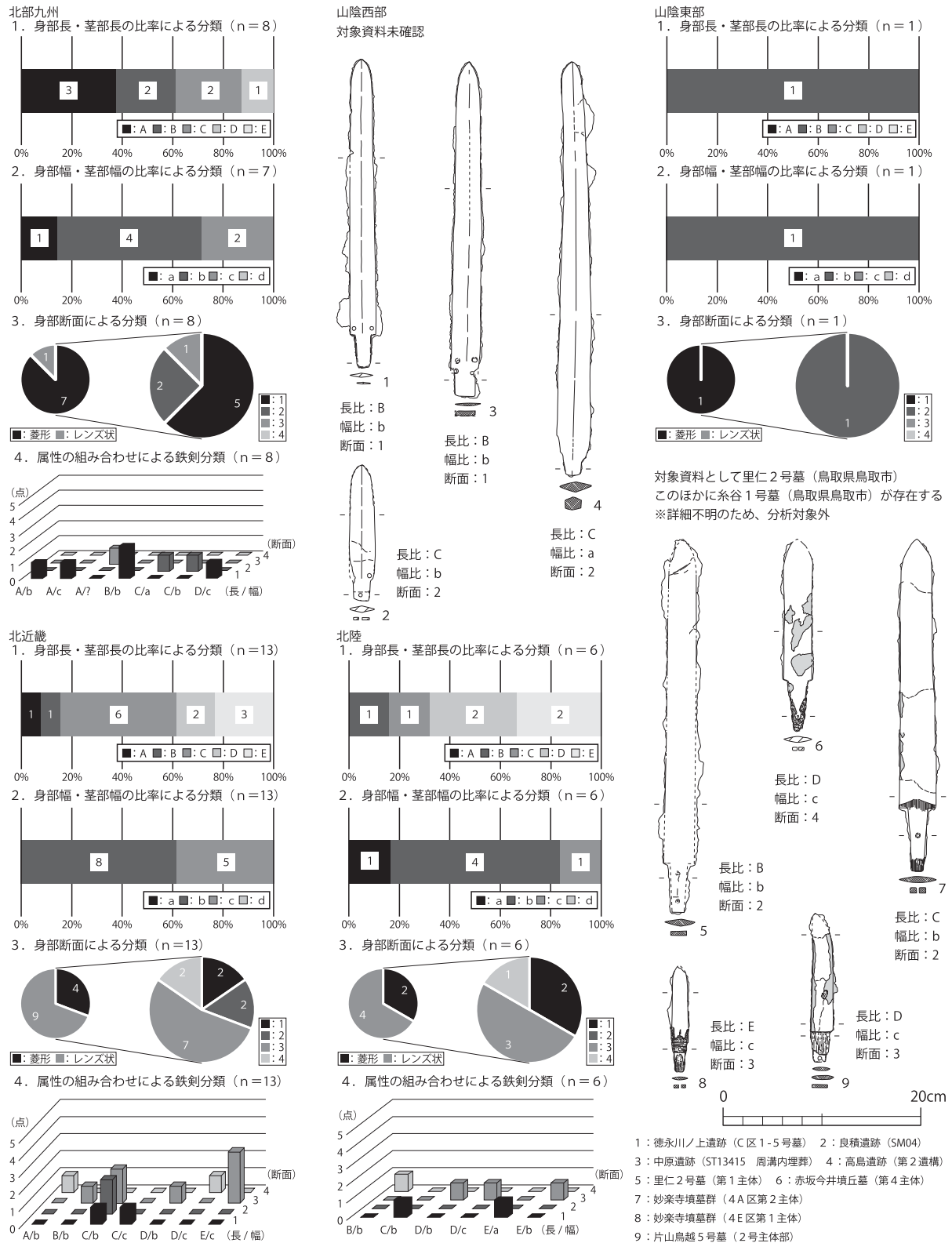
北部九州 全体のプロポーシオンが把握できる資料は限られるが、長さの比率をみるとA類～D類を確認できる。偏在的な傾向は示さず、バリエーションが存在している。幅の比率についてはb類が半数を占めるものの、a類とc類も確認できる。b類を主体とするものの、長さの比率同様にバリエーションが認められる。一方で、身部横断面は菱形となるものが多数となり、偏在性を指摘できる。ただし、比較的薄い剣身となるものが半数となる。各属性でバリエーションが認められる状況から、組み合わせについても主体となる型式は確認できない。

山陰西部 現状、当該時期の鉄剣出土は未確認である。

山陰東部 里仁2号墓および糸谷1号墓で出土している。様相が把握できる里仁2号墓第1主体出土短茎短剣は、長さの比率B類となり、幅の比率はb類となる。身部横断面は菱形で比較的厚みのある剣身を呈する。

北近畿 後期後半同様に出土量が多い。長さの比率をみるとA類～E類まで確認でき、バリエーションが確認できる。一方で、C類が半数を占める点については偏在性を想定できる状況である。幅の比率についてもb類とc類のみ確認でき、隣接する領域で集中する状況が指摘できる。身部横断面についてはレンズ状となるものが主体となり、剣身は比較的薄いものが多くを占める状況である。各属性の組み合わせについては、長さ比率E類についてはすべて幅比率c類、身部横断面3類となる状況が指摘できる。また、身部横断面は多様であるが、長さ比率C類で幅比率b類となる資料が多く、特定のプロポーシオンを指向する状況が指摘できる。

北陸 後期後半と比較して出土量が増加する。長さの比率はB類～E類が確認でき、バリエーションをもつ状況となるが偏在性は不明瞭である。一方で、幅の比率についてはa類～c類が認められ、b類を主体とする状況が指摘できる。身部横断面はレンズ状が主体となり、剣身の厚みについては比較的薄いものが多くを占める。各属性の組み合わせについては幅の比率に集中が認められるものの、長さの比率にバリエーションが存在することから多様なプロポーシオンをもつ状況を指摘できる。



第13図 日本海沿岸地域出土短茎短剣の諸相（終末期）

5. 若干の考察

前章では、短茎短剣の各部の長さおよび幅の比率、身部横断面の形態からみたプロポーシオンの指向について時期ごとに地域概要を確認した。本章では先に示した概要をもとに若干の考察を行い、各地域の様相について把握を試みる。

（１）北部九州

全体のプロポーシオンが不明瞭な資料も多く、今回の分析が全体の様相を示しているか疑義も残るが、後期前半段階で長さの比率としては地域的偏在性を想定できる。ただし、幅の比率をふまえるとバリエーションが豊富となり、偏在性が薄れる状況を確認した。なお、身部横断面は菱形となり、厚みのある剣身を基本とすることが確認できる。北部九州では中期段階からすでに多量の鉄剣が出土しており、その様相⁽¹⁰⁾を確認すると、長さの比率はA類・B類、幅の比率はb類・c類となる。身部横断面も菱形を主体とし、厚みのある剣身となることが指摘できる。前段階のこのような長さの比率がともに隣接した領域に集中するという短茎短剣のプロポーシオンの偏在性をふまえると、一定の規格性を保持しながらも後期前半段階においてバリエーションが生じている状況を想定できる。さらに、中期同様に剣身は厚みを持つ点も注目できる。後期後半には出土量が激減し様相は不明であるが、身部横断面はレンズ状で剣身は薄く、前段階と異なる状況を示す。終末期には各部の比率に多様なバリエーションが存在し、短茎短剣の主体的なプロポーシオンを抽出できない。また、身部横断面も菱形を主体としながら、薄い剣身となるものが多く、後期前半までの菱形で厚みのある剣身主体の状況と異なる。ただし、長さ比率A類・B類、幅比率b類・c類となる鉄剣も確認できる。このことから、中期段階の短茎短剣と同様のプロポーシオンを保持しながら、剣身の薄手化が生じていることを指摘できる。そのため、中期以降確認できる鉄剣を模倣した薄手の鉄剣が出現する状況を想定できる。

このような状況について、ライアンによる北部九州における鉄剣生産の再検討が行われている（ライアン2021）。これによると、後期後半以降、北部九州での鉄剣生産を想定しており、終末期には薄手短剣の主体化が生じている。本稿で示した北部九州における後期後半以降の剣身の薄手化や終末期の多様なプロポーシオンの出現については、北部九州での鉄剣生産の開始およびその具体相を示している可能性がある⁽¹¹⁾。

（２）山陰西部

山陰西部では後期後半に西谷3号墓第4主体と上野Ⅱ遺跡で出土するほか短茎短剣は認められない。なお、竹田遺跡でも出土するものの、所属時期は不明瞭である。上野Ⅱ遺跡出土事例は鉄器製作素材として評価できるため、墳墓出土事例の西谷3号墓に言及すると、身部横断面がレンズ状ではあるものの、厚い剣身となる点は注目できる。日本海沿岸地域出土短茎短剣のうち、厚い剣身をもつものは北部九州で主体的に確認されており、関連が想定できる。ただし、当該時期の北部九州では鉄剣そのものが希薄であり、山陰西部地域の鉄剣入手プロセスの検討が課題として残る。

（３）山陰東部

山陰東部についても、西部同様に出土資料が少なく、地域偏在性などの検討は現状では困難である。ただし、後期前半の松原1号墓出土資料はBc3となり、薄い剣身であるのに対し、終末期の里仁2号墓出土資料はBb2と剣身は菱形で厚くなる点は注目できる。山陰東部では後期後半段階において宮内1号墳丘墓で長大な長剣が出土しており、剣身は厚みをもつことが知られている。出土量や先に示した状況をふまえると、出土する短茎短剣のプロポーシオンにはそれほど変化がないものの、後期前半においては薄い剣身、後期後半以降に厚い剣身となる鉄剣が流通している状況を想定できる。山陰西部同様に鉄剣入手プロセスの検討が課題として残る。

（４）北近畿

北近畿では、後期前半では短茎短剣はCc2であり、横断面菱形となる厚い剣身をもつものが確認できる。しかし、後期後半以降出土量が激増し、短茎短剣Bb3・Cc3といった特定のプロポーシオンが地域的に偏在する状況に大きく変容する。身部横断面も薄いレンズ状を呈する資料が大半となり、菱形主体の北部九州や厚みのある剣身をもつ山陰とは大きく異なることが指摘できる。また、列島における製作地の一つとして評価される北部九州と異なる様相を示す点については注目できる。終末期についても多様なプロポーシオンが認められるものの、Ec3やCbといった特定のプロポーシオンを指向し、後期後半と同様に剣身は薄いものを主体とする。このことか

ら、他の日本海沿岸地域と異なり、出土する短茎短剣に地域的な偏在を指摘できる。

北近畿については岩井による弥生時代鉄剣の検討が行われている（岩井2007）。岩井の検討によると、後期後半には北近畿で鉄剣生産が行われており、同形同大の鉄剣の存在から祖形となった鉄剣を少数の製作地で比較的忠実に模倣し、かつ集中的に生産したとしている。本稿で示した特定のプロポーシオンが偏在的に分布することからもその蓋然性は高く、後期後半以降に特定の地域で鉄剣が生産されていることを想定できる。

（５）北陸

後期前半は全体のプロポーシオンが不明であるが、身部横断面が菱形で剣身は薄い。後期後半はレンズ状で剣身が薄い資料を確認でき、終末期も同様にレンズ状で薄い剣身となる資料が大半を占めている。身部横断面の形態が菱形からレンズ状に変化するものの、剣身は薄いという特徴が確認できる。一方で、後期後半の小羽山30号墓出土短茎短剣はBc2となり、同時期の北近畿で主体となる短茎短剣と平面的な共通性は認められるものの、剣身が菱形で厚みを持つ点は異なる。また、終末期には資料数が増加し、幅比率はb類を主体とするが、プロポーシオンは多様である。このことから、隣接する北近畿とは様相が異なり規格の指向性は確認できない。ただし、主体となる短茎短剣は身部横断面がレンズ状の薄い剣身となる点は類似しており、終末期以降の鉄剣入手方法について検討する必要がある。

6. おわりに

弥生時代の短茎短剣について、日本海沿岸地域出土資料の様相把握を行い、各地で出土する短茎短剣の指向および偏在性について確認した。結果として、先行研究を追認するにとどまったが、各部の長さや幅の比率および身部横断面といった属性について、列島内での生産・流通について検討を行う上で有効な分類であることが明らかとなった。今後は論をさらに深め、弥生時代鉄剣の全容の解明に貢献したいと考える。

註

- （１）鉄剣各部の計測値については、実見した資料は実測値を採用し、その他については基本的に報告書の計測値に準拠した。ただし、報告書未刊行遺跡および先行研究により取り扱われ、報告書計測値と異なる値が指摘されている資料については各論の実測図から計測したものを採用した。なお、各論から数値を採用した資料については表1備考欄に文献を記載した。
- （２）全国集成資料については紙幅の都合により文献の記載を省略した。ご容赦願いたい。
- （３）本稿では、古墳時代の鉄剣となる可能性が高い資料は除き、確実に弥生時代となる鉄剣を対象として資料収集を行った。
- （４）剣身長出現頻度のピークについてはおおむね杉山が指摘（杉山2015a）した列島出土の弥生時代から古墳時代にかけてのピークと類似している。
- （５）鉄剣出土については時期ごとに特徴的な分布を示し、ライアン（ライアン2021）らが指摘するように、鉄剣の流通を把握する上で示唆的な様相といえる。しかし、本稿では紙幅の都合により詳細に言及することができなかったため、別稿で改めて論じたい。
- （６）分類については全国集成資料をもとに、欠損などの遺存状況が不良で計測困難なものを除外した資料で実施している。ただし、欠損資料を除くと対象資料が著しく少ない地域については、身部横断面が把握できる資料を分析対象に含んだ。
- （７）上野Ⅱ遺跡出土短茎短剣（第12図3）は多量の炭化物を含む中央ピットをもつ竪穴建物から出土している。剣身先端および茎尻付近が欠損しており、実見では剣身先端付近の欠損部は鋭く、工具による切断も想定できる。鉄器生産の素材として山陰西部にもたらされた可能性が想定できる。
- （８）西谷3号墓第4主体出土短茎短剣については、実見および報告書X線写真（島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館2015）から茎尻が欠損しているものと判断した。そのため、長さの比率は不明である。
- （９）山陰西部については後期後半に挙げた資料のほかに竹田遺跡出土鉄剣がある。ただし、時期が不明瞭のため本稿では取り扱わなかった。
- （10）紙幅の都合によりグラフ等は省略し、表中記載にとどめた。
- （11）北部九州の終末期の短茎短剣は多様なプロポーシオンをもつ。特に長さの比率にバリエーションが生じていることから、特定の地域における規格性を有する鉄剣製作品の茎部切断といった再加工の結果としても評価できるが、北部九州で複数の鉄剣生産地が存在し、各地がそれぞれ規格を有した状況を反映しているとも考えられる。今後の課題としたい。

参考文献

- 東 潮 1986「鉄・銅の武器－A鉄剣, B鉄刀, C鉄戈, D鉄矛」『弥生文化の研究』9、雄山閣出版。
- 池淵俊一 2001「日本海沿岸地域における弥生時代鉄器の普及－山陰地方を中心に－」『日本海（東海）がつなぐ鉄の文化』鉄器文化研究会・鳥取県教育委員会。
- 池淵俊一 2003「刀剣・矛・戈・ヤリ・素環頭刀」『考古資料大観』第7巻、小学館。
- 岩井顕彦 2007「北近畿出土弥生時代鉄剣の再検討」『物質文化』84、物質文化研究会。
- 禹 在柄 1999「鉄剣の型式学的研究」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室。
- 会下和弘 2007「弥生時代の鉄剣・鉄刀について」『日本考古学』第23号、日本考古学協会。
- 大庭康時 1986「弥生時代鉄製武器に関する試論－北部九州出土の鉄剣・鉄刀を中心に－」『考古学研究』第33巻第3号、考古学研究会。
- 小田富士雄 1977「鉄器」『立岩遺蹟』福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会。
- 小羽山墳墓群研究会編 2010『小羽山墳墓群の研究 越地方における弥生時代墳丘墓の研究』福井市立郷土歴史博物館。
- 川越哲志 1993『弥生時代の鉄器文化』雄山閣。
- 川越哲志編 2000『弥生時代鉄器総覧（東アジア出土鉄器地名表Ⅱ）』広島大学文学部考古学研究室。
- 潮見 浩 1982『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館。
- 杉山和徳 2015a「日本列島における鉄剣の出現とその系譜」『考古学研究』第61巻第4号、考古学研究会。
- 杉山和徳 2015b「鉄剣を集めた。」『西相模考古』第24号、西相模考古学研究会。
- 杉山和徳 2016「長茎短身鉄剣に関する一考察」『埼玉考古』51号、埼玉考古学会。
- 杉山和徳 2017「弥生鉄剣論」『日本考古学』第43号、日本考古学協会。
- 鈴木崇司 2020「弥生時代の東日本出土鉄製武器にみる鉄器製作技術」『考古学研究』第67巻第3号、考古学研究会。
- 立谷聡明 2020「弥生時代の九州地方における鉄製武器の普及」『古代武器研究』Vol.16、古代武器研究会。
- 豊島直博 2004「弥生時代における鉄剣流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号、日本考古学会。
- 豊島直博 2010『鉄製武器の流通と初期国家形成』奈良文化財研究所学報第83冊、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。
- 野島 永 2004「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐる」『考古論集』河瀬正利先生退官記念事業会。
- 野島 永 2009『初期国家形成過程の鉄器文化』雄山閣。
- 東森 晋 2024「海士町竹田遺跡発掘調査資料について」『古代文化研究』第32号、島根県古代文化センター。
- 福島孝行 2007「弥生墳墓における鉄剣の副葬（一）－丹後地域－」『考古学に学ぶ（Ⅲ）』同志社大学考古学シリーズIX、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 福島孝行 2018「弥生墳墓における鉄剣の副葬（二）－但馬・丹波地域－」『実証の考古学』同志社大学考古学シリーズXII、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店。
- 村上恭通 1999「鉄製武器形副葬品の成立とその背景－三韓・三国時代と前方後円墳成立期を対象として－」『先史学・考古学論究』Ⅲ、龍田考古学会。
- 村上恭通 2000「鉄器生産・流通と社会変革－古墳時代の開始をめぐる諸前提－」『古墳時代像を見なおす』青木書店。
- 村上恭通 2017「鉄器化した弥生社会の実現とその背景－弥生時代鉄器生産論の可能性－」『平成29年度瀬戸内海考古学研究会第7回公開大会』予稿集、瀬戸内海考古学研究会。
- ライアン・ジョセフ 2017「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』212、古代学研究会。
- ライアン・ジョセフ 2019「古墳出現期における刀剣類の生産と流通の二相－吉備地域を中心に－」『日本考古学』49号、日本考古学協会。
- ライアン・ジョセフ 2020「鉄製武器からみた津倉古墳」『津倉古墳』岡山大学考古学研究室。
- ライアン・ジョセフ 2021「弥生時代の北部九州における鉄剣生産の再検討」『考古学研究』第68巻第1号、考古学研究会。

遺跡文献一覧（簡略表記）

- 1：福岡市教育委員会2012『入部XIV』。2：福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会編1977『立岩遺蹟』。3：福岡県教育委員会1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』。4：那珂川町教育委員会2006『安徳台遺跡群』。5：筑前町教育委員会2020『東小田峯遺跡Ⅱ』。6：佐賀県教育委員会1991『志波屋六本松乙遺跡』。7：武雄市教育委員会1986『みやこ遺跡』。8：長崎県教育委員会1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』。9：大村市教育委員会1987『富の原』。10：坂田邦洋1976『対馬の考古学』。11：佐賀県教育委員会2003『柚比遺跡群3』。12：嘉穂町教育委員会1987『嘉穂地区遺跡群』Ⅳ。13：長崎県教育委員会2005『原の

辻遺跡 総集編Ⅰ』。14:福岡県教育委員会1996『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』。15:北野町教育委員会1999『良積遺跡Ⅲ』。16:北九州市埋蔵文化財調査会1976『高島遺跡』。17:穂波町教育委員会1992『穂波地区遺跡群』。18:福岡県立朝倉高等学校史学部1969『埋もれていた朝倉文化』。19:佐賀県教育委員会2012『中原遺跡Ⅳ』。20:島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館2015『西谷3号墓発掘調査報告書』。21:島根県教育委員会2001『上野Ⅱ遺跡』。22:鳥取市文化財団2012『松原1号墓』。23:西伯郡中山町教育委員会1997『鳥取県西伯郡中山町退休寺遺跡』。24:公益財団法人鳥取市文化財団2017『里仁墳墓群』。25:同志社大学文学部文化学科1994『糸谷古墳群』。26:大宮町教育委員会2001『左坂古墳（墳墓）群G支群』。27:京都府埋蔵文化財調査研究センター1983『京都府遺跡調査報告書』（1）。28:京都府埋蔵文化財調査研究センター1995『京都府遺跡調査概報』（66）。29:京都府教育委員会1987『埋蔵文化財発掘調査概報』。30:京都府埋蔵文化財調査研究センター1998『京都府遺跡調査概報』（84）。31:弥栄町教育委員会2001『弥栄町内遺跡発掘調査報告書』（19）。32:岩滝町教育委員会2000『大風呂南墳墓群』。33:福島孝行2007『弥生墳墓における鉄剣の副葬（一）―丹後地域―』『考古学に学ぶ（Ⅲ）森浩一先生傘寿記念献呈論集』。34:篠山市教育委員会1993『黒田坪墳墓群』。35:岩井顕彦2007『北近畿出土弥生時代鉄剣の再検討』『物質文化』（84）。36:峰山町教育委員会2004『赤坂今井墳丘墓発掘調査報告書』。37:京都府埋蔵文化財調査研究センター1994『京都府遺跡調査概報』（57）。38:財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター1992『京都府遺跡調査概報』（49）。39:豊岡市教育委員会1994『加陽土屋ヶ鼻遺跡群』。40:豊岡市教育委員会2002『妙楽寺墳墓群』。41:兵庫県教育委員会1993『内場山城跡』。42:福井県教育委員会1991『若狹中核工業団地関係遺跡発掘調査報告書』。43:福井市立郷土歴史博物館・小羽山墳墓群研究会2010『小羽山墳墓群の研究』。44:福井県教育庁埋蔵文化財調査センター2010『木崎山城跡・木崎遺跡』。45:石川県埋蔵文化財センター2021『加茂遺跡Ⅲ』。46:富山県教育委員会1975『富山市杉谷（A・G・H）遺跡発掘調査報告書』。47:富山県教育委員会1982『昭和56年度富山県埋蔵文化財調査一覧』。48:富山県教育委員会1970『囲山遺跡』。49:清水町教育委員会2004『片山鳥越墳墓群 方山真光寺跡塔址』。50:大塚初重1986『原目山墳墓群』『福井県史 資料編13 考古』福井県。51:寺井町教育委員会1997『能美古墳群』。

図版出典一覧

所蔵先を示したものは筆者作成。文献を記載したものは一部改編して再トレースしたもの。

第1図～第9図:筆者作成。第10図:1(遺跡文献31)、2・3・8・12(遺跡文献40)、4・5・9・10(遺跡文献32)、6(遺跡文献30)、7(遺跡文献39)、11(遺跡文献24)、13(遺跡文献28)、14(遺跡文献22)、15(遺跡文献8)。第11図:1～4(遺跡文献8)、5・6(遺跡文献42)、7(遺跡文献26)、8(遺跡文献22)。第12図:1(遺跡文献13)、2(遺跡文献12)、3(島根県埋蔵文化財調査センター)、4(島根大学考古学研究室)、5・6(遺跡文献32)、7(遺跡文献30)、8(遺跡文献29)、9(遺跡文献43)、10(遺跡文献44)。第13図:1(遺跡文献14)、2(遺跡文献15)、3(遺跡文献19)、4(遺跡文献16)、5(遺跡文献24)、6(遺跡文献36)、7・8(遺跡文献40)、9(遺跡文献49)

表1 分析対象資料一覧

地域	時期区分	所在	遺跡名	出土遺構	時 期	全長	身長	身幅	身部横断面		茎長	茎幅	分類			備 考	文献
						(cm)	(cm)	(cm)	形態	厚(cm)	(cm)	(cm)	長	幅	厚		
北部九州	中期	福岡	東入部遺跡	第2次 K0113甕棺墓	中期後半	35.2	32.5	3.2	菱形	0.6	2.7	1.75	A	b	2		1
		福岡	立岩遺跡	35号甕棺	中期後半	30.1	27	2.9	菱形	0.5	3.1	-	B	-	1		2
		福岡	門田遺跡	辻田地区 27号甕棺	中期後半	27.2	24.8	2.8	菱形	0.6	2.4	2.2	A	c	2	刃関双孔	3
		福岡	安德台遺跡群	2号甕棺墓 棺外	中期後半	28.2	25.7	2.6	菱形	0.55	2.5	1.6	A	b	1	刃関双孔	4
		福岡	東小田峯遺跡	2号墳丘墓 10号甕棺	中期後半	30.74	28.4	3.58	菱形	0.7	2.34	2.51	A	c	2		5
		佐賀	志波屋六本松乙遺跡	SJ65 甕棺墓	中期前半	40.2	37.4	3.2	レンズ	0.4	2.8	2	A	b	3		6
		佐賀	みやこ遺跡	SK405 甕棺	中期中葉	32.9	29.6	4.3	レンズ	0.6	3.3	2.8	B	b	4	刃関双孔	7
		長崎	佐保浦赤崎遺跡	第1号箱式石棺墓	中期後半～後期初頭	20.95	18.5	3	菱形	0.7	2.45	2.1	B	c	2		8
		長崎	小姓島遺跡	第5号石棺	中期後半～後期初頭	24.4	22.4	3.5	菱形	0.6	2	1.7	A	a	2		8
		長崎	富の原遺跡	B地区20号甕棺墓	中期末～後期初頭	29.5	27.3	3	菱形	0.5	2.2	1.7	A	b	1		9
	後期前半	長崎	経隈遺跡	3号石棺	後期前葉	28.8	27.2	3.3	レンズ	0.5	1.6	2.2	A	b	3	槍先？	10
		長崎	経隈遺跡	3号石棺	後期前葉	31.4	28	3.2	レンズ	0.7	3.4	2.1	B	b	4		
		長崎	シゲノダン遺跡	石蓋土壇	後期前半	24.1	21.6	3.6	レンズ	-	2.5	3.6	B	d	-	刃関双孔	8
		長崎	下ガヤノキ遺跡	B地点 石棺	後期前半	23.2	20.5	4.3	菱形	0.9	2.7	2	B	a	2		8
		佐賀	柚比本村遺跡	SJ1112 甕棺	後期前半	36	33.5	4.1	菱形	0.75	2.5	2.5	A	b	2		11
	後期後半	福岡	原田遺跡	第1地点墓群C1号石棺墓	後期後半	-	-	2.4	レンズ	0.4	-	-	-	-	3		12
		長崎	原の辻遺跡	土壇墓	後期後半	-	-	3	レンズ	0.4	2	2.1	-	-	3	刃関双孔	13
	終末期	福岡	徳永川ノ上遺跡	C区1号墳墓群 5号墓	終末期	31.1	27.8	2.6	菱形	0.5	3.3	1.6	B	b	1	長剣再加工か	14
		福岡	徳永川ノ上遺跡	C区III号墳墓群 墳丘中央	終末期	33.7	31.3	3.1	菱形	0.5	2.4	1.9	A	b	1		
		福岡	良積遺跡	SM04 周溝状遺構	終末期	13.7	11.4	2.6	菱形	0.6	2.3	1.7	C	b	2	刃関双孔	15
		福岡	高島遺跡	第2遺構	終末期～古墳初頭	41.4	34.5	3.3	菱形	1	6.9	1.6	C	a	2	長剣祭加工か	16
		福岡	向田遺跡	8号石棺墓	終末期～古墳初頭	35.4	32.5	2.7	レンズ	0.5	2.9	2	A	-	3		17
		福岡	堤遺跡	石棺墓	終末期～古墳初頭	29.8	23	2.95	菱形	0.55	6.8	2.3	D	c	1		18
		佐賀	中原遺跡	ST13415墳丘墓 周溝内埋葬施設	終末期	33.3	31.1	2.8	菱形	0.4	2.2	2.05	A	c	1	刃関双孔	19
		佐賀	中原遺跡	SP13230 木棺墓	終末期～古墳初頭	41.25	36.9	3.6	菱形	0.5	4.35	2.3	B	b	1	刃関双孔	
	山陰 西部 後期後半	島根	西谷墳墓群	3号墓 第4主体	後期後葉	-	33.8	3.1	レンズ	0.6	-	1.9	-	b	4		20
		島根	上野川遺跡	SI05	後期後葉	-	-	2.1	レンズ	0.3	-	1.7	-	-	3		21

地域	時期区分	所在	遺跡名	出土遺構	時 期	全長	身長	身幅	身部横断面		茎長	茎幅	分類			備 考	文献
						(cm)	(cm)	(cm)	形態	厚 (cm)	(cm)	(cm)	長	幅	厚		
山陰 東部	後期前半	鳥取	松原 1 号墓	第 1 主体部	後期前葉	25.2	22.6	3	レンズ	0.3	2.6	2.1	B	c	3		22
	後期後半	鳥取	退休寺遺跡	A5区 SI-01	後期後葉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	詳細不明	23
	終末期	鳥取	里仁墳墓群	2 号墓 第 1 主体部	終末期	36.9	32	3.1	菱形	0.7	4.9	1.75	B	b	2		24
		鳥取	糸谷古墳群	1 号墳 2 号木棺墓	終末期	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		25
北 近 畿	後期前半	京都	左坂墳墓群	1号墳下層 第 9 主体	後期前半	14.5	11.7	2.8	菱形	0.6	2.8	1.9	C	c	2	計測値は豊島2010	26
		京都	大道古墳群	大道 5 号墳	後期後葉	35.4	30.9	3.8	レンズ	0.45	4.5	2.3	B	b	3		27
		京都	金谷古墳群	1 号墓 第 6 主体部	後期後葉	33.3	29.6	4.1	レンズ	0.55	3.7	2.8	B	c	3		28
		京都	帯城墳墓群	A支群 7 号墓第 2 主体部	後期後葉	31	26.3	4.1	レンズ	0.45	4.7	3.1	C	c	3	計測値は岩井2007	29
		京都	帯城墳墓群	B支群 北群第 1 主体部	後期後葉	32.9	27.8	3.6	レンズ	0.3	5.1	2.7	C	c	3	計測値は岩井2007	
		京都	浅後谷南墳墓	第 1 主体部	後期後葉	29.1	23.9	3.4	菱形	0.5	5.2	2.2	C	b	1		30
		京都	浅後谷南墳墓	第 1 主体部	後期後葉	22.7	18.3	3.4	レンズ	0.4	4.4	2.3	C	c	3		
		京都	浅後谷南墳墓	第 2 主体部	後期後葉	26.4	22.2	3.1	菱形	0.6	4.2	2.4	C	c	2	計測値は豊島2010	
		京都	浅後谷南墳墓	第 6 主体部	後期後葉	14.5	9.6	2.9	菱形	0.45	4.9	2.1	E	c	1		
		京都	古天王古墳群	5 号墓 第 1 主体部	後期後葉	28.8	26.8	3.7	レンズ	0.6	2	2	A	b	4	刃関双孔 計測値は岩井2007	31
		京都	古天王古墳群	5 号墓 第 9 主体部	後期後葉	23	20.1	3.3	レンズ	0.6	2.9	2	B	b	4	刃関双孔 計測値は岩井2007	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	32.8	29	3.5	レンズ	0.6	3.8	2.4	B	c	4	報告書実測図 1	32
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	38.5	34.1	4.1	レンズ	0.5	4.4	2	B	a	3	刃関双孔 報告書実測図 2	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	33.4	29.8	3.4	レンズ	0.4	3.6	2	B	b	3	報告書実測図 3	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	33.3	30.1	3.8	レンズ	0.5	3.2	1.7	B	a	3	刃関双孔 報告書実測図 4	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	36.7	31.3	4.4	レンズ	0.6	5.4	2.6	C	b	4	刃関双孔 報告書実測図 5	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	38.1	33.3	3.65	レンズ	0.5	4.8	2	B	b	3	刃関双孔 報告書実測図 6	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	36.9	31.9	4.1	レンズ	0.5	5	2.3	B	b	3	刃関双孔 報告書実測図 7	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	41.1	35.8	3.8	レンズ	0.55	5.3	2.5	B	b	3	刃関双孔 報告書実測図 8	33
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 1 主体部	後期後葉	34.5	32.4	3.7	レンズ	0.4	2.1	1.9	A	b	3	刃関双孔 報告書実測図 9	
		京都	大風呂南墳墓群	1 号墓 第 2 主体部	後期後葉	24.4	22.7	2.9	レンズ	0.4	1.7	2.2	A	c	3	刃関双孔 報告書実測図13	
		京都	犬石西B墳墓群	8 号墓 第 1 主体部	後期後葉	32.1	25.4	2.4	-	-	6.7	2	D	c	-		
		京都	犬石西B墳墓群	14号墓 第 2 主体部	後期後葉	27.3	22.9	3	-	-	4.4	1.7	C	b	-		34
		兵庫	黒田坪墳墓群	3号墓 主体部	後期後葉	33.6	29.7	4.1	レンズ	0.59	3.9	2.95	B	c	3		
		京都	論田古墳群	論田 9 号墳	終末期	40	34	3.2	菱形	0.5	6	1.9	C	b	1		27
		京都	久田山古墳群	H支群 3 号墳	終末期	13	10.7	2.1	レンズ	0.3	2.3	1.1	C	b	3		35
		京都	赤坂今井墳丘墓	第 4 主体部	終末期	19.5	14.3	3	レンズ	0.6	5.2	2.1	D	c	4	柄装着+布巻	36
		京都	白米山北古墳	第 1 主体部	終末期	34.8	29.1	4.2	菱形	0.7	5.7	2.4	C	b	2		37
		京都	内和田古墳群	5 号墳 SX02	終末期	18.5	11.6	2.3	レンズ	0.4	6.9	1.7	E	c	3	計測値はライアン 2017	38
		兵庫	加陽土屋ヶ鼻遺跡群	9 号墓 第 1 主体部	終末期	17.45	13.7	2.9	レンズ	0.45	3.75	1.65	D	b	3		39
		兵庫	妙楽寺墳墓群	4 A区 3 木棺墓	終末期	26	22.3	2.4	菱形	0.5	3.7	1.8	C	c	1	計測値は豊島2010	40
		兵庫	妙楽寺墳墓群	4 A区 第 2 主体	終末期	32.9	26.6	3.6	菱形	0.6	6.3	2.2	C	b	2	計測値は豊島2010	
		兵庫	妙楽寺墳墓群	4 C区 第 5 主体棺外	終末期	12.7	6.6	2.15	レンズ	0.3	6.1	1.7	E	c	3		
		兵庫	妙楽寺墳墓群	4 E区 第 1 主体	終末期	9.7	5.3	1.5	レンズ	0.3	4.4	1.45	E	c	3		
		兵庫	妙楽寺墳墓群	第 7 地点 第 1 主体	終末期	32.6	29.8	3.6	レンズ	0.6	2.8	2.3	A	b	4	計測値は豊島2010	41
		兵庫	妙楽寺墳墓群	第 7 地点 第13主体	終末期	31.2	28	3.9	レンズ	0.45	3.2	2.2	B	b	3		
		兵庫	内場山城跡	墳丘墓 SX-11	終末期	35.4	29.1	4	レンズ	0.5	6.3	2.5	C	b	3		41
		福井	向山B遺跡	SK09	後期中葉	-	-	2.9	菱形	0.35	2.9	1.9	-	-	1		42
	後期前半	福井	向山B遺跡	SK02	後期中葉	-	-	1.9	菱形	0.5	-	-	-	-	1		
		福井	小羽山墳墓群	小羽山30号墓	後期後葉	33	29.1	3	菱形	0.6	3.9	2.1	B	c	2	刃関双孔	43
		福井	木崎山遺跡	台状墓 1 埋葬施設 2	後期後葉	-	-	2.7	レンズ	0.55	-	1.35	-	-	3		44
北陸		石川	加茂遺跡	SI15	後期後葉	-	-	-	レンズ	0.35	2.2	1.7	-	-	3		45
		富山	杉谷A遺跡	17号墓	終末期	13.3	9.4	2.6	レンズ	0.5	3.9	1.7	E	b	3		46
		富山	板屋谷内古墳群	A支群 1 号墳下層墓	終末期	24.1	20.6	2.6	菱形	0.5	3.5	1.7	C	b	1		47
		富山	囲山遺跡	3 号木棺墓	終末期	11.2	7.7	2	菱形	0.35	3.5	1	E	a	1		48
		福井	片山鳥越墳墓群	5 号墓 第 2 埋葬	終末期	15.1	12	2.3	レンズ	0.4	3.1	1.6	D	c	3		49
		福井	原目山墳墓群	2 号墓 2 号主体部	終末期	18.1	14.3	3.5	レンズ	0.5	3.8	2.2	D	b	3	計測値は小羽山墳 墓群研究会編2010	50
		石川	能美古墳群	寺井山 6 号墓	終末期	41	36.9	3.65	レンズ	0.6	4.1	2.2	B	b	4		51

※分析資料は遺存状況が良好で全体プロポジション把握可能なものを対象とした。そのため、山陰を除く地域では対象外とした短茎短剣が多く存在しており、分析が地域様相を正確に反映しているか検討の必要がある。なお、分析対象外とした資料は第 5 図～第 7 図の分布図に示したとおりである。